書評

鄭毅、全成坤『帝国への道――原理・天皇・戦争』

정의、전성곤『제국에의 길：원리・천황・전쟁』

諸点淑

소명출판，2015

『帝国への道』は、東アジアの「近代」をめぐって活発に研究成果を蓄積してきた鄭毅、全成坤によって著された本である。中国人・韓国人の両者は、明治期の日本内部の視点に立ち、帝国・天皇・アジアの問題を徹底して解剖し、そこから現在の「右翼」問題の原理を分析している。

では、本書を簡単に紹介する。本書は、右翼思想家と呼ばれた大川周明とその周辺人物の言説を中心に、日本の「右翼」と「右翼思想」が誕生する、その原理を探っている。つまり、日本の「右翼」や「右翼の思想」が形成されていく論理そのものを究明しようとしているのである。こうした「思想（thought）」化を解明するため、とくに注目したのが、大川周明という人物である。両著者は、戦前、日本が帝国主義を創出し、太平洋戦争の勃発に多大に貢献したイデオローグが大川周明であったとし、大川が、明治期から大正期にかけてのリベラリストであって、「右翼」内部においても異質な「新右翼」であったと指摘する。「新自由主義右翼」がもつ特徴が、どのような「右翼の思想」を導き出し、その言説がいかなる思想的な根拠に基づいて形成されたのか、彼らはそこに注目し、その思想形成の道を導き出しながら、日本の「右翼」「右翼思想」「帝国」という原理をたどっていく。

本書のタイトルを「帝国への道」と名づけた理由は、ここに起因する。とくに、両著者は、「帝国」という言葉を、民族（他民族を含む）と国家（他国家を含む）を統治して管理、支配するという意味より、領土的限界を超えて、外部へ向かう「脱中心主義」的で「脱領土化」したものという意味として用いている。つまり、

「「脱中心主義」や「脱領土化」が持つ意味としては、帝国は主権国家や国民国家を超えて世界的で普遍的な「理論」を持つ文脈として作用することもある」（p. 6）と指摘し、このような観点から、日本は文明国家を形成する「帝国の普遍性」をもっていたと、大川周明の言葉を借りて論じているのである。そして本書では、サブタイトルとして、「原理」「天皇」「戦争」という三つのキーワードを用いている。本書の大きな筋であるため、以下ではそれらの意味について概観したい。

大川周明は、日本が西洋と出会ったことが日本に新たな変化をもたらしたという論理によらず、西洋をモデルに設定しながらも、西洋そのものも、ある一つの社会に過ぎない存在であると見なしている。ヨーロッパも、アジアから見れば、一種の変容したものであり、中心ではないということである。逆に言えば、日本が中心となる可能性も十分あり得るという原理となる。これがサブタイトルの「原理」がもつ意味である。一方、ローマ帝国が滅亡したことに対して、大川は、道徳と宗教が全体的に調和をとれなかったこと、いわゆる「精神的な欠如」が理由であると指摘する。その反面、日本という国は、儒教や仏教、キリスト教という新しい宗教が入ってきても、日本人の精神生活にうまく適応し、さらに天皇を通じて帰一化、従順化され、矛盾は生じなかったと論じる。サブタイトルのキーワードを「天皇」とした理由は、ここにある。「天皇」というのは、「国家」と結びつくものではなく、「日本の精神」と結びつくものである。「日本精神＝天皇」こそ、帝国、つまり、「脱国民国家」「脱領土的」な帝国であると主張する。それは、既存のエンペラーを越えた日本天皇、つまり日本語の「テンノウ」の帝国であったのだ。こうした論理は、世界史を揺るがした日清戦争と日露戦争によって「血の帝国」として完成され、さらに植民地は戦争によって獲得できるという「戦争肯定論」と結びつく。こうして、太平洋戦争が勃発したのである。それは、日本が、日清戦争と日露戦争を起こす以前に置かれていた自らの位置、つまり「従属」の危機を忘れて、一等国、あるいは西洋と対等な文明国として自らを見なし始めることによって生じた論理であった。このような時代的な時流に乗り、大川周明は、日清戦争と日露戦争、そして第一次世界大戦を、「白人との戦争、アジアの解放」とし、革命意識を形成していく。これが、三つ目のキーワードを「戦争」とした理由である。

一方、大川は、西洋による侵略を阻止するため、被抑圧民族であるアジアの連帯を主張した。しかし、アジアの論理では、日本による領土支配と日本国家の拡張という日本的なエートスとして、天皇を注入する必要があった。まさしく、西洋のローマ帝国を模倣しつつ、日本を軸としてアジアにおける日本中心化を狙い、周辺国の領土を獲得しようとする、「国民国家的な帝国」への道を歩

んだのである。これが本書のタイトルである、国民国家的な立場から日本中心主義的な支配論理を構築していく、「帝国への道」である。

以上の内容に基づき、大川周明を軸として「右翼」が作られていった原理を俯瞰すれば、日本における「右翼」の性格を捉えることが可能となると、著者たちは指摘する。しかも、大川は、保守の側面を内包しつつ、帝国を志向したという点で、「右翼」と「保守」の融合論理も見せる人物であると論じる。そして、これを理解すれば、現在の日本の「右翼」に流れる「血脈」を垣間見るヒントが得られると述べている。

さて、本書は、第一部「近代と帝国意識の知造」、第二部「帝国の完成と戦争への道」に大別され、全八章で構成されている。第一章（近代日本の欧米崇拝と「国粋主義」の発明）は、明治維新と日清戦争という二つの事件の意味を、「国粋主義」に基づき、再吟味している。それは西洋に対する近代の超克を実験する作業であり、東アジアから「優越主義＝国粋主義」を獲得する、二重性の路程であったと論じる。そして、これを通して、中国と朝鮮に対する劣等のイメージを固着化する言説を完成させていったと指摘する。第二章（「倫理的帝国意識」の内核と天皇の流着）は、明治期の代表的キリスト教研究者である松村介石の宗教的な特徴を究明している。とくに、その宗教的内面の核心の中で、倫理と天皇がどのように絡み合っていたのかを明らかにすることを試みている。松村は、「道会」を設立し、「新宗教」を提唱する。その本質は、古代から現在まで不変であることを尊重する「新宗教」であった。そして、松村が「道会」で主張した普遍的な論理そのものが、まさに天皇を中心とした帝国意識への回帰であったと解明する。

第三章（宗教の「暴力」と「脱宗教」の暴力）では、大川周明の宗教思想が持つ特徴や、宗教と暴力行為をめぐる関連性の問題について扱っている。ここでいう宗教と暴力の問題とは、「宗教」を暴力的なものと見るのではなく、「人間の内面を一つの宗教を利用して同化させる」という意味であり、それを暴力と見なしている。大川は、宗教の解釈を通じて、「道」の天皇制国家という独自の「天皇観」を構築し、欧米のキリスト教との出会いを通じて松村介石の「道義」を再解釈しながら、宗教の東西融合だけでなく、東西の共通要素を導き出した。それは、日本特有の、宗教が歴史的天皇論へと収斂されていく過程であった。

第四章（「国民国家論」、その「反復」と「脱」反復の再審）は、大川周明と蓑田胸喜の時代認識と、両者が作り出したナショナリズムの様相を探るものである。大川と蓑田は、相互批判的で緊張関係を見せてはいるものの、大川が主張した「道徳的実現＝国家」論は、結局、蓑田の反対的な意見をベースに補完され、完成される。こうした両者による新しいナショナリズムの共謀は、これを

尊王主義と再編させるため、国家思想の受容と排除を経た統制の中から、「国民思想」の創出と絡んでいく。

第五章（二つの「帝国意識」と「グロテスク」なものとしての天皇）では、大川周明と蓑田胸喜の国家論について、比較検討を行っている。大川と蓑田は、互いに異なる国家論を提示しているが、結局、共通して「天皇＝日本主義」論理を構築していくこととなる。ここから、大川の「宗教的天皇論」は誕生する。

第六章（日本的「中庸」の解釈と国体概念のねじれ）では、大川周明の西洋の宗教思想に対する認識と、またそれを東洋の儒教と融合させ、そこから「中庸」の再解釈を試みた思想的行程について検討している。西洋の宗教思想を受容しつつ、東洋の儒教を折衷させるという方式で「中庸」を再解釈した大川周明は、日本神道を加味した「中庸の天皇像」に至るようになる。

第七章（「儒教」の変形と国体論としての天皇）では、儒学という概念が、日本国内でどのように「日本中心主義」の論理へと再編されていったかについて、論じられている。そのために取り上げられた人物が、阿部吉雄である。儒学の概念は、修養から国民道徳へと「変容」し、再解釈された。具体的に言えば、朝鮮の李滉の影響を受けながらも、「日本中心主義」を提唱する尊王論に「変形」してしまったのである。

最後の第八章（「日本」内部の「ポスト東アジア論」）は、大川周明のアジア認識論である。大川は、アジア文化の集合体として日本を設定する論理を岡倉天心から学ぶが、アジア文化は、日本精神へ再編成される論理となり、植民地化の言説を含むアジアの可能性が導き出されることとなる。いわゆる、日本の伝統、日本の精神はアジア精神であるという論理として、再構成されたのである。

以上、本書の内容を各章ごとにまとめてみたが、このように、鄭毅、全成坤の両著者は、日本の「右翼」や「右翼思想」が「思想化」するプロセスを、韓国や中国の思想も視野にいれ、徹底的に解明している。今日の日本の右翼問題を理解するためにも、本書は、学界を問わず、今後日本社会に反響を呼び起こし得る力作であると、評者は確信している。ただし、本書は、「西洋」と「日本という東洋」との関係にのみ焦点を当て、植民地化される他の東洋には目を向けていないという限界をもつ。日本の「帝国への道」は、西洋の帝国らと同様に、植民地という東洋なしでは語れない。こうした側面まで視野に入れ、「帝国への道」を論ずるなら、より「右翼」の「思想化」が明確になると、評者は考える。いずれにせよ、こうした原理を立証するため、両著者は、明治期日本の知識人を中心に、きわめて膨大な資料を用いて徹底的な検証を行っている。旧植民地のアジアの研究者たちのこうした研究成果が、今日の日本（人）に投げかけるメッセージは、示唆に富むところが多いだろう。